

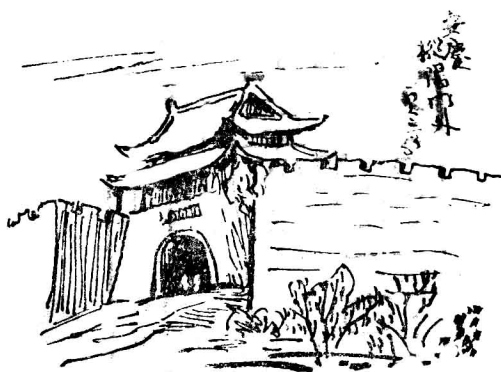
中国の記

松 島 博 著



中国の記

松島 博 著



著者略歴

大正 2. 10. 6 松阪に生る

津中、八高、東大国史科卒（昭和11年）

神宮司庁嘱託、神宮皇学館大学講師

松阪市教育長を経て現在三重県立図書館長

在支 3 年余、千島警備 1 年、ソ連抑留 3 年

予備役陸軍中尉

昭和三十三年五月十五日印刷 定価 三百円
昭和三十三年五月二十日発行 千 五十五円

松阪市日野町

著者 松島 博

発行者 三重県公共図書館協会

津市栄町二丁目八六

印刷所 東亜印刷有限会社

津市丸之内本丸

発行所 三重県立図書館

電津四八四一番

中国の記刊行に序す

三重県人のみで編成された我が部隊、歩兵第百三三連隊長として唯一人の異郷人であつた私にとって、三重県出身の人達の温和で従順で、真面目な県民性から来る数多の思い出は本書の目次をみただけで、次々と私の脳裏に去来し、尽きることを知らない。

松島君は私が連隊へ赴任すると間もなく、内地から着任した新進気鋭の将校の一人として、且つまた当時連隊本部所在地であつた銅陵市街の警備小隊長として、その豊かな教養と文才とともに、特に親しみの深い幹部の一人であつた。

この度同君の筆になる中国に於ける生活の記録並に、華中の風物などを収められた「中国の記」を上梓せられることを、心から嬉しく思います。

最近の数多い戦記物の中にあつて、その内容が主として華中を舞台とした珍らしさと、所謂暴露もの、或は血腥い残酷なもの等と異り、ほのぼのとした随筆随想風の温かさ溢れるものであり、我々部隊に従軍した

ものにとっては、なつかしい戦場の明け暮れを、改めて眼前に蘇えらせてくれるとともに、従軍に関係なき人々にとつても、現在の新生中国と比較して、幾多の感慨を催されることであらう。

遙か鹿児島寓居より松島君の御労作に敬意を表するとともに、本書が一人でも多くの人々に愛読されることをお祈りして、発刊の御祝の言葉と致します。

昭和三十三年春

大 寺 敏

序

歴史的な事象に対する考え方は、戦時中と戦後とは殆んで百八十度の転換をみたのである。しかしこの著しい転換というものも、今日の日本人の個々の考え方に於ては、これまた相当懸隔があり、今日是なりとみたものも、後世の史家は行過ぎであるとみるかも知れない。後世の政治はどの方向に進むかは予測出来ない。しかし戦争の悲哀と残酷さをしみじみと感じた日本人は、今後は成可く之を避ける方向に、進むことは間違いないと思われるし、またそうでなければならぬ。

人の一生には様々の変衰があり、運命の皮肉もあるように、国家の一生にも失敗もあれば、成功もあり、行き過ぎもあれば劫情もある。禍を転じて福とし、失敗も一つの経験として将来への糧とするに吝であつてはならない。

私は中支那に従軍生活三年有余、この間の日誌を今日再読してみると、今日の批判眼からは笑うべき所もあり、かたくな所も多々あることと思う。しかしこの眼で体験した生々しい事実は、これを否定することは出来ない。中国の風俗、習慣、生活、伝統、環境、自然といった事柄にも触れて、描写したつもりである。

また下手な俳句が多く並べてあるが、これも陣中の私の唯一の糧となったもので、これで自己満足を感じているのである。

この日華事変から十数年を経た今日の中国は、社会主義国家として、過去の面目を一新したと謂われる。

が、個人の生活や習慣については、尚伝統的なものが残っていると思われる。そう何もかも捨てられ、変えられて全然別個の国が誕生したとは思われない。

私はこの戦時中の在支記録については、何の着色も訂正も加えず、一字一句当時書き記した生のままに、これを皆様にみて頂くことによつて、今日の中国を理解する一つの資料となれば幸甚と思うのである。

但し仮名使い、難しい漢字、今日では解りにくい軍隊用語等は改めた。

表紙の題字「中国の記」は、三重県日中友好協会副会長、元松阪市長庄司桂一氏の御揮毫に依るものである。

表紙其の他のカット、装幀は上野市在住の松浦莫章画伯の労によるもので、同氏は私と同じ師団の報道班員として、安慶にいて彩管を揮われた従軍画家である。

両氏に深く謝意を表する。

また遙か鹿児島より発刊を祝つて頂いた元第百三十三連隊長大寺敏大佐及び其の間に立つて、御世話を願つた同連隊附井村二郎中尉（現在松阪市の井村屋製菓株式会社社長）両氏に対し、厚く御礼を申上げる。

昭和三十三年四月二十日

三重県立図書館長
（三重県公共図書館協会長）

松 島 博

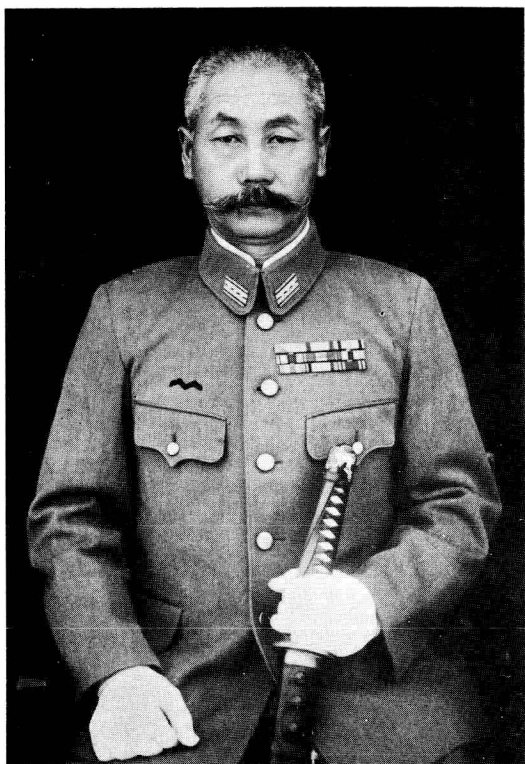


安慶迎江寺振風塔を望む

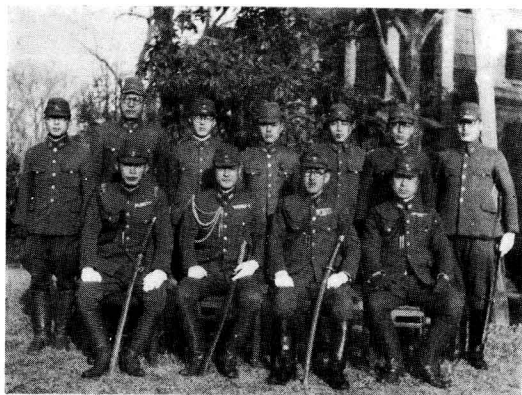
皇^み
軍^{いくさ}
は

塔
を
お
か
さ
ず

古
都
の
秋

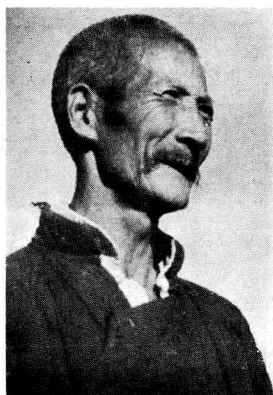


われらの部隊長 大寺 敏大佐（鹿児島出身）



参謀長、参謀と部付将校

前列左より 吉田中佐、山岸少佐、山田大佐、
笠 少佐
後列左より 畑内中尉、山口中尉、原 中尉、
伊藤中尉、田茂井中尉、松島中尉、
白藤中尉



典型的な老人
ラオレン



銅陵の姑娘達
クーニヤン



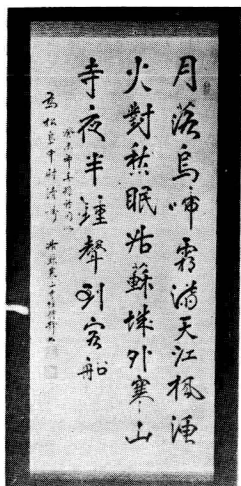
輜重隊の雪中行軍



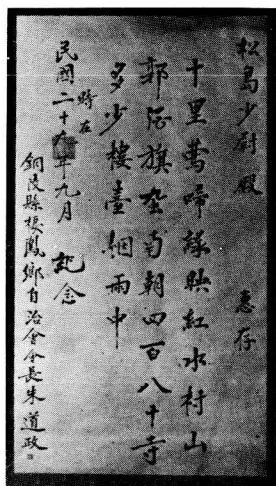
和平地区の壁画



渡河風景



張繼の楓橋夜泊（寒山寺住職の筆）



杜牧の江南春（銅陵自治会長の筆）



長江に水を掬む男



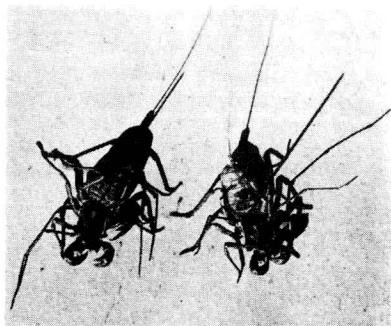
水牛に乗って
左より 少年 太田軍曹 松島少尉



揚子江の水を掬んでこれを
明礬ですまして飲用とする

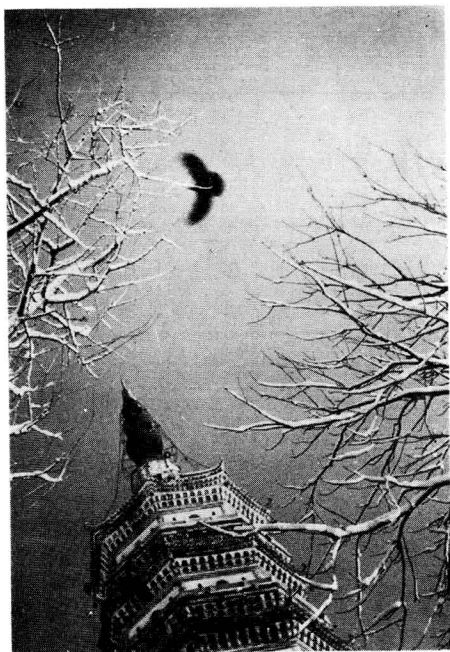


秋は 洋車に乗って
ヤンチョー



「蛇蝎」の如く嫌われる 蝎
サソリ

明の太宗王宗徐が、約三百六十余年前に創建したもので、当時の塔の高さは二十四丈あり。呉・楚に俯仰したという。同治、光緒、民国七年修理された。



安慶迎江寺の振風塔



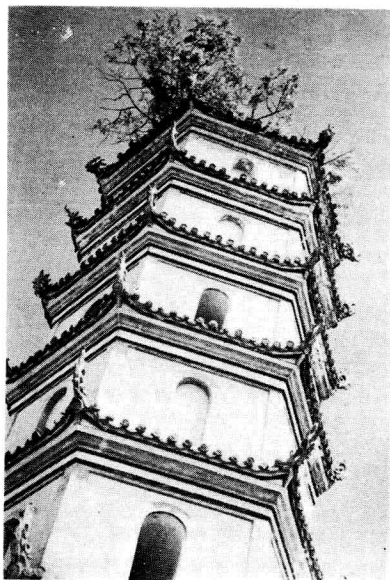
塔と姑娘
クーニヤン



塔上の姑娘



望 楼



蘭谿の古塔



安慶城外余忠宣の廟
(元時代の安慶鎮守の將)



亭



居芝那支

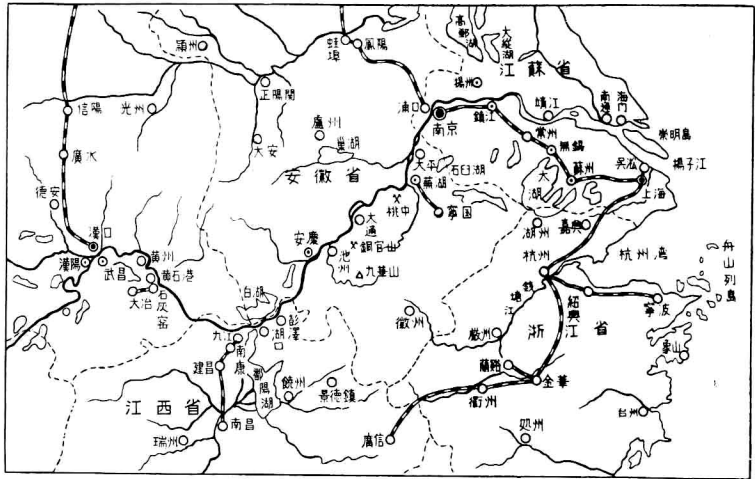


中尉島松の馬上

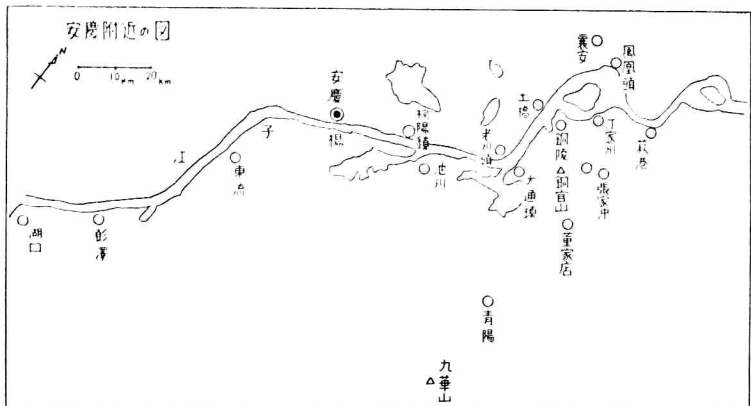


誌軍從ったり持

中 支 地 図



安 慶 附 近 の 図



陣中句抄（ホト、ギス入選句より）

早春や山ふところの古き廟
麦笛や兵がなれば支那の児も
老兵の蜜蜂飼へりひたすらに
陣佗し鳴のなく音もきゝなれて
征き勇む人馬に霏々と松の花

松島翡翠